

## 第12章 プロジェクト学習

### 1. 指導の背景

#### 1) なぜ今プロジェクト学習か

##### 【プロジェクト学習】

英語を学習の手段として位置付けた学習(Learning through English)。この活動への注目の日本の教育背景には1990年代頃から聞かれるようになった「参加型学習」や1998年に創設された「総合的な学習の時間」などがあげられる。また、英語教育面では1989年以降、学習指導要領の外国語教育では、コミュニケーション能力が重視され、さらに、第二言語や外国語を用いて教科の内容を教える中で自然に目標言語を習得させる内容中心教授法(Content-based Approach)への関心が高まっていることも大きく影響している。

#### 2) プロジェクト学習の特徴【p190】

全体性や継続性に重きを置く学習で、生徒の内在于る力を引き出すことを目標としている

#### 3) プロジェクト学習の手順【p191】

生徒中心とはいえ、年間計画として大きな枠組みは教師が決める場合もある。ただし、常に生徒がプロジェクトに関わっている気持ちを持てるようにする。

#### 4) 最終プロダクトと評価について

プロジェクト学習では、最後に必ず具体的に学習成果を示す。

##### 【3種類のプロダクト】

- ・口頭発表を含むもの：オーラル・プレゼンテーション、ポスター・セッションなど
- ・文字を使った作品：レポートや英語新聞、ニューズレターなど
- ・コンピューターを利用した作品

##### 【評価】

- ・生徒に自己評価、相互評価をさせる
- ・教師が行う場合、ポートフォリオ評価が適切

### 2. 指導の実際

#### 1) 情報発信に焦点を当てたプロジェクト学習—「ビデオレター」制作

英作文の練習ではなく、実際に誰かにメッセージを送るためなら、生徒の興味関心も高まる。具体的には、学校のALTや交換留学生、海外の姉妹校に送って見てもらうなどするとよい。

- ① グループ分けとテーマ作成：1グループ3～5人程度。同じ内容が重ならないようにする

- ② 原稿作成 : この段階で教師添削する
- ③ プレゼンテーション練習 : 原稿を読まない、カメラに向かって話す、全員参加
- ④ ビデオ撮影
- ⑤ ビデオ編集
- ⑥ ビデオ鑑賞と評価 : 教師も生徒間も行い、評価のポイントは内容、英語、態度とする
- ⑦ 姉妹校や交流校がある場合は送る

## 2) 地域に密着したプロジェクト学習－観光ボランティア

学校の所在地によって、その地域の歴史や伝統、文化と関わったプロジェクトを見つけることができる。実際に留学生や海外からの訪問者を案内することがあれば、動機づけは高まる。

- ① グループリサーチ : 案内する場所を決め、情報収集し、英語でまとめる
- ② 知識補充ならびに表現指導 : ①と並行して地域の知識補充、英語表現指導を行う。
- ③ プレゼンテーション能力を高める : パワーポイントを作成し、英語で発表。
- ④ 模擬案内 : 案内の前に、実際に現地について英語で練習する
- ⑤ 案内実施 : 観光案内の際に 10 個の約束事を書かせ、意欲を高めさせ、評価の基準にする
- ⑥ まとめのパンフレットづくり : 英文パンフレットをつくり、留学生の母校に送る
- ⑦ 評価 : ポートフォリオ評価が適切。自己評価、案内された側のガイド評価、プレゼンテーションに対する相互評価などが使える。

## 3) 「総合的な学習の時間」と連携したプロジェクト学習－ワークショップ「世界がもし 100 人の村だったら」

「総合」は学年が上がるにつれてお荷物な扱いをされがちだが、これを英語教育と連携させ有効活用することができる。

- ① 関心の隔たりを知る活動
- ② 情報量の格差を知る活動
- ③ 調べ学習を経験させる
- ④ プレゼンテーションの準備をさせる
- ⑤ プレゼンテーション
- ⑥ 「世界がもし 100 人の村だったら」ワークショップ

これらの活動をすべて英語でできれば理想だが、レベルに応じて部分的に英語を「学習の手段」として活用することから始める。また、事前に必要な英語表現を指導していくことも必要である。

## 4) レポート作成型プロジェクト学習－オーストラリア留学体験記

卒業レポートとして、高校生が自ら興味・関心があるテーマを選び、教師の指導を受

けながら1年間かけてレポートを仕上げていく。

まずは全体指導で「卒業レポート」の説明や作成上の一般的な注意を与え、個別指導に入っていく。

- ① 個別指導の初めの面談で内容や構成を話し合う
- ② おおまかな目次を作らせる
- ③ 参考資料、参考文献を読ませる
- ④ 目次ごとにまとめた量の英文を書くたびに提出させ、添削は読んで理解できるかグローバルエラーの訂正にとどめる
- ⑤ 全部書き終わったら、目次順に並べ前書きや後書き、参考資料を書かせる
- ⑥ 清書の最終チェック

### 3. まとめ

プロジェクト学習は、教科・科目として独立するものではなく、教師の熱意と工夫で現行のカリキュラムの中で実施できるものである。しかし、教科書がないため教師も消極的になりがちで、生徒も慣れていない場合がある。最初から本格的なプロジェクトを行おうとするのではなく、グループワークの練習やミニプロジェクトを実践してみるのもよい。

テーマ設定では生徒の年齢やレベルにふさわしいものを選び、飽きてしまわないよう配慮が必要である。また、教師の指導と生徒の自立性の適正なバランスが必要になる。

#### 【考察】

英語を英語以外の科目と連携して練習させるのは、より実践的でアウトプット指導には効果があると感じた。実際、総合の時間は教師と生徒のバランスによってはうまくいかない場合が多く、教師によっては特に力を入れていない人も多い。そこで、より必要性のある英語の科目と連携させることはどちらの科目にとっても意義のあるものになるだろう。

プロジェクト学習に関していくつか紹介されていたが、ビデオレターや観光案内は留学生などが対象とされている。これは日本人同士で英語で発表しあうことの難しさの表れだと感じた。聞いている側が英語が理解できない、また、消極的な生徒は人の発表にすら目をむけないこともある。また、レポート作成では、担当者に個別で指導するとあったが、教師の人数、労力的に難しい場合もあるだろう。これらを考慮すると、プロジェクト学習は、学校の環境が大きく影響する学習であるといえる。教師だけの責任でも、生徒だけの責任でもない点が難しい点かもしれない。